

# 三重の「子ども食堂」



誰もが「お腹も心も満たされる」居場所づくり

## 太陽の家 桑名子ども食堂

【桑名市常盤町】

「太陽の家 桑名子ども食堂」は、県内でいち早く開設された子ども食堂の一つ。運営するのは、子ども見守り訪問、学習サポート、フードバンクなどの活動も行う、NPO法人「太陽の家」です。「誰にでもヘルプ(助けて)」といえる居場所が必要ですよ」と話すのは、理事長の対馬あさみさん。対馬さんが想いを共有する友人とともに任意団体を結成したのは、平成27(2015)年のこと。翌年に同法人を設立すると、桑名市内で開催された「広がり、子ども食堂の輪! 全国ツアーinみえ」実行委員長、県が作成した「子ども食堂開設ハンドブック」の取材・編集も担当。現在は「三重子ども食堂ネットワーク」代表を務めるなど、子ども食堂普及のけん引役でいらっ



対馬 あさみさん



調理風景



お腹も心も満足できる食事

本年1月第3木曜日の夕刻、「桑名市総合福祉会館」内の同食堂を訪ねると、準備の真っ最中。調理室を覗くと、揚げ物や豚汁の香りが漂い、食欲をそそられました。スタッフの中には男性の姿もあり、手際よくコロッケを揚げています。その中の一人、リタイア後に仲間と「蕎麦道楽倶楽部」を結成するなどの活動を続ける依田仁さんに声をかけると「自宅にこもっているより、皆と一緒にの方が楽しいですよ」と和やかに話してくれました。時には同食堂で蕎麦をふるまう

「子ども食堂」とは、子どもたちに無料か低額で食事を提供する場所のことです。子どもたちにとっては、一人だけでも利用でき、安心して美味しく食事できる「居場所」となっています。

近年、三重県内でも増えつつある「子ども食堂」の多くは、食事に加えて遊びや学習の場を提供したり、保護者同士の交流を図るなど、大人も含めた「地域食堂」の役割も担っています。

今回は、県内で「子ども食堂」運営に取り組む6団体・グループをご紹介します。

\*各「子ども食堂」の開催日時・場所・料金・対象年齢・受け入れ方法や人数などには違いがありますが、状況に応じて延期・休止する場合があります。また、各運営団体グループが行うイベントや行事に際しても同様です。事前に必ずご確認ください。

取材・文：中村 真由美・中村 元美・堀口 裕世  
撮影……梅川 紀彦・尾之内 孝昭  
中村 元美・堀口 裕世  
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

こともあり、とても人気だということでした。

着々と準備が進む様子を見ていて、高校生の姿が多いことに気付きました。現在の対象年齢は小学生高学年から高校生まで。高校生たちは利用者であると同時にスタッフ。食事を堪能する一方で、忙しい時にはエプロンを着けて手伝ってくれるといいます。「皆に美味しいご飯を食べてほしい」と、来訪者一人ひとりに話しかける対馬さん。食堂内は、春の日差しのような温もりに包まれていました。



NPO法人「太陽の家」の皆さん

### お問い合わせ

NPO法人「太陽の家」  
TEL 050-5318-3524

多世代交流サロンに  
子どもたちの笑顔があふれる

## 羽津子供食堂&ゆう

【四日市市大宮町】



「羽津子供食堂&ゆう」の食事風景

れているのが志氏神社。4世紀築造と伝わる前方後円墳や、神様に足を折られた話が語り継がれる狛犬など、数々の文化財を有していることでも知られます。

平成28(2016)年、同神社の敷地内に建つ古民家が、多世代交流サロン兼郷土資料館として開設されました。その名は「さろんde志氏我野」です。毎月第2・第4金曜日には「羽津子供食堂&ゆう」を行うと伺い、昨年12月22日に訪ねると、サロンを運営する「羽津地区まちづくり推進協議会」会長の内田寛さん、奥様で副会長のかわりさん、事務局長の大西通さん、食堂担当チーフの後藤咲希子さんが温かく迎えてくれました。皆さんに話を伺うと、同協議会が取り組んでいるのは、地区住民の高齢化対策や核家族世帯の子育て支援、多

行っているとのことでした。

この日は、食堂開始時刻の1時間前に訪問しましたが、すでに大勢の子どもたちで賑わっていました。退屈しないように折り紙を教えたり、クイズを出題して謎解きを楽しんでもらっているのは、ボランティアスタッフの高校生。中に



子どもたちに折り紙を教える高校生スタッフ※



調理の様子※



季節に合わせた  
彩り豊かな食事



お菓子を配る内田会長

は、以前は子ども食堂の利用者だった人もいると教わりました。また、食堂で提供するのには毎回100食で、使用する食材の多くは、地区内の農家やJ・A・企業などからの寄付で賄い、献立は旬や栄養面などを考慮してシェフが考えているといえます。この日はクリスマス直前ということもあり、フライドチキン・ご飯などに加えて、イチゴのロールケーキに三重県産の「三重いちご」が添えられていて彩り豊かでした。チキンを頬張る子どもたちに話を聞くと、「美味しいよ!」に続いて「カレーライスが一番好き!」と元気な声が返っ

てきました。すると突然、大きな袋を担いだサンタが登場。袋の中からお菓子を取り出し、一人ひとりに配り始めたため、さらに賑やかになりました。実は、サンタに扮しているのは会長の内田さん。満面の笑顔の子どもたちを見て、その表情も一層柔和になっていました。

なお、同食堂では家族での参加も多く、料理が苦手な方や、子育ての悩みを持つ保護者が「ここはオアシスのよう」と喜んでくれるという話も伺いました。大人にとっても貴重な息抜き場所となっているのでしょうか。

「私たちの目標は、地区内に子どもの笑顔があふれ、高齢者も若い世代も含めて交流できる活気あるまちづくりです。ここは、私たちの理想を詰め込んだ場所です」と話す皆さん。その優しい眼差しは、羽津地区の未来を担う子どもたち全員に注がれていました。

### お問い合わせ

「羽津地区まちづくり協議会」事務局  
TEL 059-3331-5333



「羽津地区まちづくり推進協議会」の皆さん

※印の写真は取材先から提供していただきました

「ひじりやなごよ」と伝えたい

# ハワイアンカフェ子ども食堂

【津市丸之内】



食後は楽しく折り紙や物作りを

を中心としたボランティアたち。その中心となるのは、「株幸コーポレーション」の経営者で、NPO法人「HOME」の代表も務める花井 幸介さんです。

人数が増えたため、丸之内の焼き肉店「幸」の2階に移動しました。けれども、大門の店も毎日子ども食堂の気持ちで、悩みを持つ来店者を受け止めています。「食べたい子はご飯を食べ、食べずに店にいてもいいということにしています。来てくれた子には出来るだけ声を掛けて、話を聞き、一緒に考えます。『一人じゃないよ』『ここにいないだよ』と伝えたいんです」。

津市の中心部にある「幸ポレビル」の2階では、毎月最後の日曜日、賑やかに子ども食堂が開かれます。訪れた子どもたちは、ご飯を食べ、折り紙などのワークショップで遊び、お菓子や食材を選んで持ち帰ります。18歳以下は無料で、19歳以上の参加者は一人300円を支払います。

明るく出迎えるのは、高校生や大学生

10代の頃から個人的な悩みに深く苦しみ傷ついたという花井さん。「何とか自分の悩みを乗り越えた今、それも貴重な経験だと現実を前向きに受け止めることができるようになりました」。苦しみを希望につなげたいと願い、悩んでいる子の居場所になればと、8年前、経営している津市大門の「ハワイアンカフェ & ダイニング」で子ども食堂をはじめ、

一人親家庭などへ食材を配布するパントリー事業も行っていますが、活動は子どもだけではなく、老若男女みんなを対象としているそうで、取材時にも、事情があつて家に居づらいというお年寄りがいれば早く店を時を過ごしていました。LGBTQ+の人の支援や悩み相談にも応じています。店の経営に加えて、子ども食堂の準備



代表の花井 幸介さん

や、ボランティアの学生たちとのコミュニケーション、寄付の受付など、まさに八面六臂の活躍を続ける花井さんなのですが、さらに、現状打開のため二つの大きなプロジェクトに向け、動きはじめています。その一つは「200円スーパーマーケット」。「丸之内の商店街の方たちにも応援してもらい周囲のことが分かってくると、近所には高齢の方が多く、買い物などに困っていると気がきました。そこで実験的に、焼き肉店の前にテーブルを置いて、小分けした卵や野菜などを200円で販売したらとても好評でした。寄付してもらった食材な

ど無料の品も並べています。なるだけ早く、場所を確保して開店したいと思っています」。無人販売ですが、お金もきちんと入れられているそうです。もう一つは「三重県を心で繋ぐプロジェクト」。出張子ども食堂を、三重県内のすべての市で行おうというもので、「地元で場所を提供してもらい、みんなでご飯を食べたり、体を動かすなどしたいと考えています。美容院に行くことが難しい子どものためヘアカットするスペースや、爪磨き、シニア世代と子どもとのレクリエーションなど多彩な催しにしたいので、美容師さんや企業な

どたくさんの方に声をかけています。多くの方に関わってもらって、子ども食堂のことや、少しの協力が支援になることなどを伝えていきたいです。



立ち上げ時からのメンバー、渡辺 誉子(たかこ)さん(左)と花井さんの母の珠実さん(中央)と花井さん



お菓子や食材を選ぶ「縁日タイム」



ボランティアスタッフとの打ち合わせ



「200円スーパーマーケット」は近所のお年寄りに好評

けて懸命に駆け回る花井さん。熱い想いで三重県全域に出かけます。「たくさんの人に出会い、子ども食堂のことを知ってもらいたいですね」と、明るい笑顔で語ってくれました。

## お問い合わせ

「ハワイアンカフェ&ダイニング」  
代表 花井 幸介さん  
TEL 080-5160-5559

# みんながつながる、絆の種をまく 松阪子ども食堂

【松阪市殿町・垣鼻町】



「みんなで食べると美味しいね」とおにぎりにア～ン

「松阪子ども食堂」では、毎月第3土曜日の12時30分から松阪市福祉会館で開かれるイートインと、第1金曜日14時30分

阪でお総菜店を経営している方からの呼びかけがあり、フェイスブックで声を挙げてみたら、私たちを入れて12人が参

から松阪市第二公民館でおにぎりなどのテイクアウトを行ってしています。いずれも予約は不要で、子どもは無料、大人100円となっています。「会場に來られない家庭に食材を届ける活動も行っていきます」と教えてくれたのは、事務局を務める楠谷さゆりさん。活動スタート時からのメンバーです。「活動を始めたのは、平成29(2017)年の秋でした。松



事務局の楠谷 さゆりさん(左)と代表の志田 茂美さん

加してくれたんです。何度も話し合い、試食会を開くなどして、『みんな食堂』という名前、第1回を始めました。今は『松阪子ども食堂』に名前を変更しましたが、子どもだけではなく地域の色々な世代のみんなに來てもらいたいと思っています。」

試行錯誤を経て、イートインに訪れる人が増え、170食を用意するテイクアウトもほとんど残らなくなりました。けれども、楠谷さんの中にはすっきりしない想いが残っていたといいます。「本当に支援が必要な子どもたちや、一人暮らしに届いているだろうかと自問し、月に1回の催しではその根本的な解決

にはならないというジレンマがありました。でも今は、続けていくことが力になると信じています。いろいろな人が来てくれて、毎月一緒に食事を作ったり、食べたり、話したりすることは、地域の絆を作ることの種まきになっていると思うのです。ボランティアには学生もシニア層の方たちも来てくれて、世代を超えた協力関係が生まれていますし、食事に来てくれる方たちにとっても、ここの出会いが未来の何かにきつとつながると思うのです。実際に、いつも来てくれる年配の女性と小学生の男の子と、お母さんがここで知り合い、毎月ここで

話すことを楽しみにしているというようなうれしい出会いも起こっています。いろんな人に来てもらえるよう、あまりこまごました決まりを作らず、ハードルを低く、ゆるやかにしています。他のメンバーたちも、子どもの貧困や独居老人などの問題に関心を持ち、互いに手をさしのべ合うためには、地域のみんなのつながりが大事だということを、活動を通して実感したといっています。今ではボランティアの人数も増え、食材なども寄付で賄えるようになりました。そして、「オーガニック子ども食堂」をめざして、一部でも有機食材を使うようにし



ボランティアメンバーは明るい老若男女



賑やかな調理風景



人数分をきれいに並べて



この日のメニュー



子ども服や絵本などの提供も

ているとのこと。「ご寄付の申し出が多いのには本当に感謝しています。コロナ禍の影響で、みんながわいわいと食えることや、絵本の読み聞かせなどできない部分もありませんが、居心地のよい場所づくりをめざして、ずっと続けていきたいです」。これからも毎月、明るい笑い声が響いていくことでしょう。

## お問い合わせ

「松阪子ども食堂」事務局 楠谷さゆりさん  
TEL 080-5168-8330

シングル親子を応援し、地域のつながりを提供

# 親子食堂たまる

【玉城町丸】



「たまきのつどい場協<sup>かき</sup>」は、「合同会社 たまきあい」の運営により、玉城町在住の人、また職場が玉城町であれば、誰で

も利用できる居場所。毎月第2・第4金曜日は「親子食堂たまる」の会場となり、支援が届きにくい一人親の家庭を対象に、1家族利用300円で夕飯時に開放されています。

夕飯に間に合うよう手分けして準備

調理にあたるスタッフは現在7人ほどが交代で手伝っています。「協」を利用する一人暮らしの高齢の方もいて、この活動が生きがいにもなっているようです。季節に応じて出汁の染み込んだおでんや栗ご飯、ちらし寿司

「全国的にいろいろな子ども食堂が展開されていますが、『協』ではシングルで頑張っている方々に、月2回、夕食の心配をしなくてよい骨休みの日を設定しよう」と令和3年から取り組んでいます。いろいろな人の知恵や力を借りて子育てをし、上手に頼り合える間柄になっていくのが理想です」と話すのは「特定



「たまきあい」「玉絆」のスタッフ。右が津田さん ボランティアの調理スタッフ

非営利活動法人玉絆<sup>たまきずな</sup>職員の津田久美子さん。一人親の場合、日中は仕事で忙しい、種々ある相談の場にも足を運びにくいといった悩みが聞かれます。

職員や調理スタッフも一緒に食事をし、「おかわりもあるよ」「全部食べたの、偉いねえ」「よく噛んでね」「まだ残ってるよ」と普段は親が気にすることも声を掛けるので、子どもとしっかり向き合っ

て食事を摂ることができ、レシピを教え

てもらったり、町内の情報を共有したり、普段交わる機会の少ない世代との交流もあります。の面倒を見たり、参加した人がまた別の人を誘ったりと、いい連鎖が生まれています」と津田さん。民家を利用して

こともあり、親戚の家のように寛げて、参加する皆さんの笑顔から安心して過



お皿に均等に盛り付ける



シチューは人気メニューの一つ



「かな塾」に集まる子どもたち※

るところ。旬の食材提供もあるといいます。「地域のみなさんが気にかけてくれることがとてもありがたいです。玉城町は顔の見える関係がつくりやすいと感じています」。

「親子食堂たまる」から派生したのが、学習支援の場の「かな塾」です。塾の講師や元教員、子ども好きのメンバーが5、6人集まり、週2回、放課後に開放しています。まずは宿題をして学習の習慣をつけることを目的に、子どもたちの創造性を活かし、得意なことに取り組める時間を大切にしています。

「玉絆」では子どもの居場所づくりの

一つとして、多様な学びの場を提供する

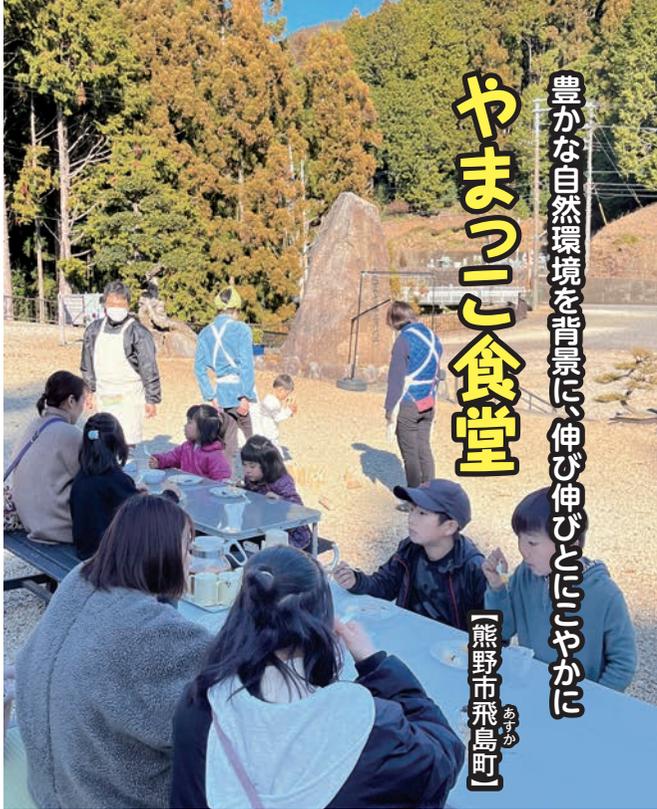
目的でフリースクールも運営。地域で子どもを育てていく風土がまちに生まれ、そんな思い出がきっかけとなって、将来は玉城町に残ったり、Uターンしてくれたらと願っています。

お問い合わせ

TEL 0596-58-2251

※印の写真は取材先から提供していただきました

# 豊かな自然環境を背景に「伸び伸びと」「やまっこ」や「やまっこ」食堂



【熊野市飛鳥町】

食べ終われば庭で遊ぶ子どもたち。企画によっては無料の日もある

の影響で人の関わりが少なくなっており、子どもたちの遊ぶ場や親御さん同士も交流する場が極端に減ってしまいうち、子ども食堂を通じてコミュニティが取れたらと始めました」と

ひとときを提供しました。1周年の記念イベント「やまっこ祭」では、熊野市社会福祉協議会や木本高校の協力も得て、射的などのゲームコーナーを設け、スパーボールすくいや昔ながらの遊びを楽しんでもらいました。



「やまっこ夏祭」には60人が参加※



辰本 育代さん



辰本 友弘さん

清流・大又川沿いにある熊野市飛鳥町・五郷町は、緑に囲まれた山間部の集落。そんな自然環境の下、天理教神内分教会を会場に大人2000円、子ども1000円で利用できる「やまっこ食堂」が月に1度オープン。子育て世代を中心とした交流の場となっています。

令和3年5月にスタートさせ、毎月30人程の利用があります。『当時はコロナ

話す代表の辰本 友弘さん。最初はカレーライスなどの食事を提供していましたが、おやつが喜ばれるとのリクエストを聞き、毎回、軽食メニューを考案し、そのときどきで催しを企画しています。

感染防止に気を遣い、コロナ禍でも交流の場だけは続けたいと、非常事態宣言が出たときには、お菓子をテイクアウトにし、自分たちで花火を上げて心安らぐ

甘さほどよいぜんざいにはあられを浮かべます。「手間と時間はかかりますが、経費をおさえ、みんなで工夫しています」と辰本 育代さんはキッチンで「こり。節句などにちなんだメニューや、季節柄望まれるかき氷、またタピオカドリンクやクレープといった子どもたちに食べて欲しいものにも挑戦しています。『自宅で作るのと違う材料だったりすると、うちでもやってみようかなと思います』とスタッフも新たなメニューには興味津々。「杵と臼を借りて餅つきもしました。熊野市の和菓子屋『キリンヤ』さんにはどら焼きの生地を目の前で焼



調理中も和気藹々(わきあいあい)と



お団子は4つの味で

「卒園式での先生のお礼を話しば」と友弘さん。

いてもらって、餡を挟むのは子どもたち。体験ものは喜ぶよね「次のメニューを試作してみようよ」と賑やかに意見を交わしています。子どもたちも高学年になると、調理を手伝ったり、受付で参加者におやつを配ったりと、頼もしい動きを見せています。



どら焼き体験※

食べた後は子どもたちは庭で元気に走り回っています。「過疎化が進む地域ですが、全校生徒の名前と顔はわかりますから少人数の強みもあります。大自然に囲まれた場所だからこそ味わえる良さを知ってもらい、皆さんとともに地域全体が活性化していければ」と友弘さん。

「卒園式での先生のお礼を話しば」と友弘さん。

合ったり、引越す家族への記念の寄せ書きをしたり、『やまっこ食堂』が相談できる場になつてきているのがうれしい「手伝いのスタッフさんがいるので継続できていますし、パンやジュースを寄付してくださる善意の気持ちにも助けられています」と辰本さんご夫婦。



スタッフは参加者でもあり、随時募集中です

子どもたちは同じ保育園と中学校に通っていますが、現在小学校は別々。離れても月に1度、「やまっこ食堂」で会えると楽しみにしているようです。

## お問い合わせ

「やまっこ食堂」 代表 辰本 友弘さん  
TEL 080-4759-4440

※印の写真は取材先から提供していただきました